

市民による夏季展示
めぐる・かわる・つながる
吹田で体感！ 自然のふしぎ

会期：令和8年(2026年) 7月18日(土)～ 8月23日(日)



【左上】千里南公園のソメイヨシノ 【右上】紫金山公園のクスノキ
【左下】こもれび通りの紅葉 【右下】佐竹公園のメタセコイア並木 (撮影と構成：内田陽造)

今年の市民による夏季展示のテーマは「吹田で体感！自然のふしぎ」です。「めぐる・かわる・つながる」の通しテーマのもとでは6回目となります。

昨年結成された「すいはく自然発見隊」の活動成果が一堂に会し、本誌にはその骨子が掲載されています。まずは大和言葉に宿る日本人の自然観^{ことのは}について四季を表現する言葉の美しい響きや心の風景に思いをはせています。つぎは吹田ならではの四季の風景が目飛び込んできます。鉄道、鉄塔、橋梁ならびに溜池や火山灰層が織りなす四季折々の光景です。極め付きは都市化がすすむ吹田でもなぜか生息するキツネやタヌキなどの哺乳類です。意外なことにわたしたちはイタチやアライグマとも共存しているのです。

実際の夏季展示では昆虫たちも大きくクローズアップされる予定です。また展示場中央に陣取る大きな木が装いも新たに出現します。どうぞご期待ください。

(当館特別館長 中牧弘允)

市民による夏季展示 —吹田で体感！自然のふしぎ—

市民による夏季展示は、市内の小学校が夏休みの時期に毎年実施し、吹田の自然と環境について子どもたちと一緒に見つめ考える展示を目指しています。

展示の企画と運営は市民ボランティア「すいはく自然発見隊」が行い、昨年の「めぐる・かわる・つながる -さがしてみよう！すいたの自然-」を開催しました。発見隊2年目の今年は「吹田で体感！自然のふしぎ」です。

毎年の企画に学校との連携で、市内全小学校の4年生に自然発見シートを配付、木や花や草、虫や鳥など動植物、身のまわりの環境や自然について、感じたことや調べたことを絵と文にしたものを送ってもらい、送られてきたすべてのシートを展示してきました。昨年はその中からこれまで多くの観察記録があったアジサイを取り上げ「すいたの自然発見！」と題したコーナーを設けて、いろいろな視点から取り上げる展示を行いました。今年は虫たちのふしぎを取り上げる予定です。

吹田で見ることのできる生き物たちの生態系の展示も引き続き設けます。

展示室中央に大きな木を配置し、自然について楽しく学べるクイズのコーナーも充実さ

せる予定です。

昨年皆さんに楽しんでいた「すいはくこどもデー」は、今年も2回開催することになりました。兵庫県立人と自然の博物館から「ゆめはく号」がやってきます。

普段なかなか見ることのできない昆虫の標本展示や生き物たちと触れ合う機会を設けます。生き物に変身する工作、水辺の生き物と触れ合ったり、浸水地歩行を体感できるイベントも用意します。吹田の地層の成り立ちを示し、博物館の前で見ることができるピンク火山灰など、地層や火山について学ぶ展示もあります。

初日には、こども科学電話相談でおなじみの昆虫科学教育館館長・久留飛克明氏の講演会「虫は何を見ているのか」を開催します。

この展示は自然や環境について子どもたちと一緒に私たちも学びながら何かを見つけていく活動であり、吹田を考え仲間づくりをする活動でもあります。まずは夏季展示「吹田で体感！自然のふしぎ」をご覧ください。そして何かを感じていただけたら、ぜひ私たちと一緒にこの活動に参加してください。

(すいはく自然発見隊長 藤田和則)

自然の言葉のふしぎ —大和言葉に宿る日本人の自然観—

地球温暖化の影響などで春と秋が短くなる一方、暑い夏が長くなる「二季」や、夏の猛暑を含めた「五季」という言葉も生まれてきた。また気象庁は気温40度以上の日について「酷暑日」と名付けた。

日本の四季の節目もあいまいになり、季節

感が希薄になったと言われて久しい。

確かにライフスタイルの変化によって自然との距離が遠のき、五感を通して四季の移ろいを愉しむ感覚が、どこか鈍くなっているように思えてならない。

古来、日本人は自然を敬い慈しみ、自然に

寄り添って、季節に対する鋭い感性が情緒と余韻のある語感を生んできた。それは自然を描写する言葉、自然になぞらえた言葉、自然の知恵を記した言葉など、自然にまつわる“ことのは（言の葉）”を美しい大和言葉として後世の私たちに残してくれた。

例えば、春の言葉には「はるめく」、「うらら（麗）」、「かすむ（霞む）」、「におう（匂う）」、「こち（東風）」、「うすらい（薄氷）」、「なたねつゆ（菜種梅雨）」、「やまわらう（山笑う）」など、やわらかく優しい響きが多く感じられる。

夏の言葉には、「なつ（熱）」、「あおあらし（青嵐）」、「せみしぐれ（蟬時雨）」、「はくう（白雨）」、「くものみね（雲峰）」、「きう（喜雨）」、「やましたたる（山滴る）」など、自然のエネルギーを生き生きと伝え、強さや勢いが感じられる。

秋の言葉には、「あきめく」、「こもれば（木漏日）」、「もののあはれ（物の哀れ）」、「うつろう（移ろう）」、「ひぐらし（蝸、日暮）」など、変化や終わりを感じさせる響きがあり少し特別な美しさがあるもののどこか寂しさも感じられる。

冬の言葉には、「そぞろさむ（漫寒）」、「ふゆざれ（冬曝れ）」、「しんしん（深々、沁々）」、「しもよ（霜夜）」、「さえわたる（冴え渡る）」、「こごえる（凍える）」など、静かで内面的な印象があり音の少ない世界の広がりが見えられている。

このように大和言葉は自然の単なる様子だけを表現しているのではなく、長い時間の中で育まれた美しい言葉であり、その時に感じる空気や心の動きまで含んでいる。

しかし、外来語や流行語があふれ、効率ばかりが求められる現代社会の中で、私たちは便利さと引き換えに、美しい大和言葉を少しずつ失いつつあるのではないだろうか。

だからこそ、私たちは、あえて大和言葉を日々の暮らしの中で使い続けることが大切なのだと思う。言の葉には、人と人との語らいにそっと彩りや潤いを添え、豊かな感性を育んでくれる不思議な力がある。

それゆえに、この美しい大和言葉を、私たちは決して過去の遺物にしてはならない。

心よりそう願ってやまないのである。

（すいはく自然発見隊 西尾 昌）



写真：「暮れなずむ山の端」自宅より望む

吹田で体感！自然のふしぎ

— 鉄道や鉄塔に沿うように巡ってみました —

吹田市内には多くの鉄道路線が通り、駅や関連施設があります。千里緑地などでは特高送電線で繋がった鉄塔が連続して立っています。大型の通信塔も多く見られます。

一方、こうした現代社会の重要インフラに沿う遊歩道や公園では、様々な草花や樹木が育ち、鳥や虫や魚もいて、季節の移ろいを感じる景観も多くあります。

そんなエリアをいくつか巡ってみました。

池を渡る風が爽快な3月末、千里南公園のソメイヨシノが見頃に。写真1の右手、丘の下は阪急千里線のトンネルです。

園内には「樹木医と一緒に樹勢回復処置をおこなっています」の表示が目立ちます。ソメイヨシノの寿命は約60年と言われますが、早めに適切な処置を施すと長生きできるようです。「子孫を残していくための枝です」の札を付けた木もあります。「一枝相伝」ですね。（写真2）

一方、10月以降に8℃以下の寒さに約800～1000時間さらされることで休眠から目覚め、春の暖かさで開花するようなので、このまま温暖化が加速すると近い将来、お花見が出来なくなるかもしれません。



<写真1>



<写真2>

岸辺駅から市民病院の方を眺めると、線路に沿う遊歩道、開花時期が異なる桜など多くの街路樹があります。その向こうは健都レールサイド公園です。（写真3）

かつて、この付近には国鉄の操車場がありました。今もJRの線路が全国へとつなが



<写真3>



<写真4>

り、地下からは旧石器時代～近代まで、多くの遺物が出土しています。

神崎川を渡る新御堂筋「十八条大橋」の走る大阪メトロ御堂筋線。右岸堤防の傍ら「水鳥の道」に沿って、季節の風を感じ、鳥たちの様子を見ながら上流へ。JR京都線、おおさか東線、そして阪急千里線を過ぎると「中の島公園」の緑が目に入ります。この辺りや安威川との合流地点近くでは、この冬も北国から渡ってきたユリカモメの姿。奥に阪急京都線の鉄橋を渡る車両も。（写真4）

桜の向こうを走行するモノレール。（写真5）万博記念公園前の駅舎で、夏には巣にエサを運ぶツバメの姿も。自然文化園では関係者の半世紀を超える努力の結果、緑豊かな森が整備されました。季節を彩る草花、鳥の声が聞こえ、風が薫ります。

昨年、夢洲で「静けさの森」を構成していた樹木の一部は、この地から運ばれました。静



<写真5>



<写真6>

けさの森の一角にあった生物多様性を象徴したオブジェ「いのち球」は、昨年12月、大地の池と国立民族学博物館の間に移され、今では、その空間に馴染んでいます。

万博開幕1周年の頃、近くでフジが開花。

蜜を求めて集まるクマバチがブーンブーンと騒がしいですが、比較のおとなしい昆虫です。（写真6）

菩提池を囲む佐竹公園の並木。奥の高台に通信塔。写真7の手前付近に可憐なハスが見られるはずが、昨夏は想定外。花も葉も茎も無い不思議な光景に遭遇。カメが芽を食べてしまった？バンが怪しい？コイかな？サギかも…と情報は錯綜。対処の術もないまま大暑が過ぎ、やがてセミの声も消えました。霜降、立冬と季節が進み、周囲の木々は色を変え、葉を落とし、雪が積もる日も。

原稿を執筆中の4月中旬、芽吹いたメタセコイアの並木は、日に日に緑濃く。（写真8）そうなると気にかかるのはハスの行末です。



<写真7>



<写真8>

ニュートンを取り囲むようにつながる千里第4緑地、樹木や孟宗竹と鉄塔のコラボがあちらこちらで見られます。遠く六甲山系に沈みゆく夕陽と茜色の共演も。（写真9）

鉄塔が青い水面に映る高町池。（写真



<写真9>



<写真10>

10) 海老池へと続く遊歩道で、春には様々な鳥の声、初夏にはヒメボタルの光の舞、そして紅葉が印象的です。

早春の釈迦が池に十数羽のカモ。南側の高台の奥、吹田サービスエリアの高い鉄塔が見えています。（写真11）

コバノ ミツバツツジが濃いピンクの花を咲

かせる頃、広場のクスノキの下にはたくさんの赤茶色の落ち葉。常緑樹ですが、この時期から新芽が出て古い葉と入れ替わっていきます。（写真12）

クスノキは、昭和53年、「吹田市民の木」に選定されました。市内の各地に大きなクスノキが多くあります。

広場から高速道路の下小さなトンネルを抜けると博物館の手前に「ピンク火山灰層」露頭観察場所。昭和の頃、磨き砂として使われていた火山灰、確かにざらざらとした感触です。約100万年前に九州から飛来したこの火山灰、想像も難しい壮絶な巨大噴火、降灰だったことでしょう。

興味は、100万年よりも遙か以前あるいは現在に至る大地の生い立ちや気候の変動へと広がります。

実は、博物館の建設工事で西側の丘陵斜面を重機で削った際、砂や粘土層の間にピンク火山灰層を含む地層が見つかったことが、博物館発行の展示図録『吹田市立博物館とその周辺 -吹田風土記の丘・紫金山公園の構想に向けて-』（平成13年）に載っています。

吹田市立博物館は、そんな地層に、そして大地と人々の壮大な物語（ジオストーリー）に、寄り添うように建っていると言えるでしょう。



<写真11>



<写真12>

巡る途中で、色々な変化やつながりを感じました。「そうなのか」と気付くこともありました。詳細は夏季展示でのお楽しみに。

（すいはく自然発見隊 内田陽造）

吹田に生息している哺乳類

戦後吹田市は急速に開発が進み、緑が削られ住宅地が造られていきました。それでも近隣の都市に比べ公園が多く、緑は豊富でした。今世紀に入り、さらに開発が進み、『吹田市環境白書2025』によると、近年の市域面積に対する緑地面積の割合は15%ほどになっています。緑地が減少していった吹田市ですが、調べて見ると多くの野生動物が生息していることが分かってきました。

生物多様性センターが野生動物の調査の目的で大阪府内のいくつかの場所に定点カメラを設置しています。大阪府の山地を除く都市の中で吹田市は哺乳類の目撃が多く、市内には5か所に定点カメラが設置されています。中でも万博記念公園に設置されたカメラに写っていた哺乳類は、キツネ、タヌキ、アナグマ、ハクビシン、イタチ、テン、アライグマと市内で最も多くの種類が確認されました。

万博記念公園は千里丘陵に造られました。会場を造成するために丘陵地の樹木は切られ池や水辺は埋められ平地に変貌しました。自然が無くなり哺乳類をはじめ多くの動物は生息地をうばわれ移動していったと考えられます。では定点カメラで確認された哺乳類はどこからやって来たのでしょうか？

動物たちは緑が無くなれば安全な場所を探して移動していきます。緑の道が続いている場所（緑の回廊）は比較的 안전한場所、こ

こを利用して野生動物は移動していくのです。吹田市近辺の緑道はどこにあるのでしょうか？吹田市の空撮写真を見ると河川敷や高速道路などに緑地があるのが分かります。それらを利用して哺乳類は移動していったと考えられます。

河川で魚類の調査をしていると、近所の方から水辺を泳ぐヌートリアや河川敷を歩くキツネの目撃情報を聞くことがあります。淀川の堤防ではキツネが巣穴を掘りそれが原因で決壊の恐れが心配されています。キツネは大阪府の絶滅危惧種ですが都市部で増えてきて見直す意見も聞かれるようになってきました。他の哺乳類も河川付近で目撃されていて河川は哺乳類にとって重要な道となっているのです。

今回の展示では生物多様性センターの協力で吹田市に設置してある定点カメラで撮影された哺乳類を映像で紹介します。森林のある場所に設置し夜間だけの撮影なので水辺の哺乳類や昼に活動している哺乳類などは確認されませんでした。今回紹介する哺乳類だけでなくまだ他にも吹田市内には生息している可能性があります。吹田市には多くの哺乳類が生息し私たち人間と共存しています。そんな吹田市の環境を皆さんに知ってもらいたいと思っています。

（すいはく自然発見隊 奥山佳一）



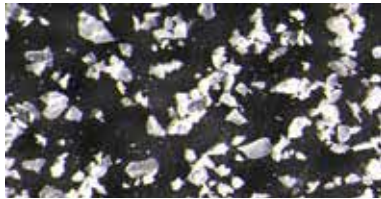
万博記念公園の定点カメラに映ったキツネ(左)とタヌキ(右) (大阪府生物多様性センターの映像)

「100 万年前の巨大噴火の火山灰層が吹田で見られるふしぎ」

吹田市は北部の千里丘陵と南部の平野部に分かれ、千里丘陵は約300万年～30万年前に堆積した「大阪層群」と呼ばれる幾重にも積み重なった厚さ約340m以上の地層でつくられています。この丘陵をつくる地層は、おも

に湖沼～河川にたまった連続性に欠ける粘土層・砂層・砂礫層がほとんどですが、大阪湾のような内湾にたまった海成粘土層や17枚の火山灰層も見つかっています。火山灰層の名称は、島熊山火山灰層のように見つかった

た地名から命名されますが、ピンク火山灰層（吹田市立博物館前、千里北公園）やアズキ火山灰層（万博公園駅南の外周道路）のようにその特徴的な色から命名されたものもあります。



ピンク火山灰層の拡大写真

火山灰は、火山が噴火してマグマから生まれます。千里丘陵で見つかった火山

灰はどこから来たのでしょうか？火山灰中のジルコンという鉱物から噴火した年代が測定され、ピンク火山灰が約100万年前、アズキ火山灰層が90万年前とされています。ピンク火山灰層もアズキ火山灰層もどちらもとても細粒の火山灰で構成されており、大部分がガラス片です。もしも近い火山だったらガラス片以外に鉱物も含まれていて良さそうですが、鉱物はわずかなので、火山灰は遠くから風に乗って運ばれてきたことが想像されます。では、どこから飛んで来たのでしょうか？

これまでの研究で、ピンク火山灰層やアズキ火山灰層はどちらも九重火山の北方にあった猪牟田カルデラが噴出源だと考えられています（檀原ほか、1992；鎌田ほか1994）。そのカルデラは現在では埋没が進み、地表にはカルデラの痕跡はありません。ただ、カルデラ周辺には巨大噴火の爪痕が残っています。その爪痕とは、大量の火砕流堆積物です。カルデラ火山は日本中にありますが、猪牟田カルデラの噴火は巨大噴火で、大量の耶馬溪火砕流（110km³）とそれに伴う広域火山灰を噴出した結果、直径約8kmの陥没カルデラができたと考えられています。

猪牟田カルデラの巨大噴火では給源周辺には大量の火砕流が流走し、層厚約200mの耶馬溪火砕流は高温で堆積したために堆積後に含まれるガラス片が塑性変形して、カチカチの溶結凝灰岩となりました。耶馬溪火砕流は九州中部に広く分布し、火砕流台地（写真の矢印参照）を形成しています。名勝耶馬溪はこの台地が風雨や風化により垂直に侵食されて形成されたものです。

火砕流は高温の粉体流で、高速で地表を流走しますが、火砕流本体に含まれる大量の火山灰は、流走に伴って上空に舞い上がりま

す。時には上空の偏西風に乗って東へと運ばれます。その結果、給源の東側に火山灰が降り積もります。約100万年～90万年前の吹田市付近は湖沼や海でした。火山灰は単独では軽いために沈みにくいですが、大量に降るとまとまって沈むため水底に積もることができます。その上には、河川などで運ばれた砂や

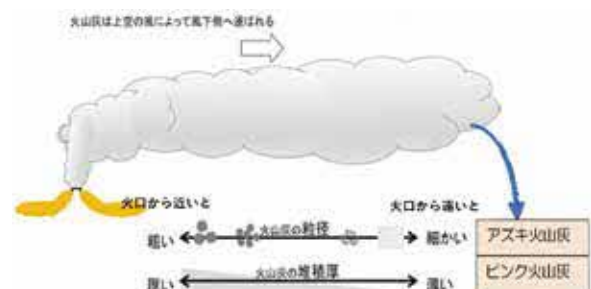


耶馬溪 矢印は、火砕流台地

泥が更に堆積を続けていました。その結果、火山灰層は地層の間に挟まれて保存されることになりました。その後、大阪層群は隆起し、千里丘陵となり、造成工事によって

火山灰層が現れたのです。地層の中の火山灰層は短時間に広い範囲で堆積する、つまり、堆積の同時間面を意味するので、離れた地層の年代を対比する上で極めて重要な鍵層になります。火山灰が鍵層となって、大阪平野やその周辺に広く分布する大阪層群の地層の対比が可能となり、大阪層群の形成史が明らかになりました。

いま、千里丘陵や泉南・泉北丘陵を形成している大阪層群は、建物や道路などの建造物により地層の大部分が覆い尽くされ、地表で地層を観察できる露頭がほとんど無くなってしまいました。千里丘陵には、ピンク火山灰層が2箇所、アズキ火山灰層が1箇所の露頭で観察することができるだけです。これらの露頭は過去を知る上で極めて重要な露頭と言えるでしょう。



火山灰の降灰（内閣府「防災情報ページ」(https://www.bousai.go.jp/kazan/kouikikouhaiworking/pdf/4kai_shiryo1_sanko1.pdf)の掲載図を加工) 火砕流に含まれる火山灰は、火砕流から舞い上がり、風で運ばれる。

(吹田地学会)

展示のみどころ

私たちが生活のなかで目にしている風景を良く見てみると、様々な生き物による営みが繰り返されています。そこには私たちの予想を上回るふしぎなことがあふれています。今回の夏季展示ではこの自然界のふしぎに焦点をあてた展示をおこないます。

吹田の自然環境

吹田市域は1960年代に開発される以前は、北部は尾根と谷が入り組んだ緑豊かな丘陵地帯、南部は湿田が広がる沖積平野でした。かつてはよく見られた生き物や昔の人々の暮らしの道具などから吹田の自然の移り変わりを見ていきます。

100万年前の巨大噴火の火山灰層が吹田で見られるふしぎ

吹田市立博物館のすぐ側で見られる「ピンク火山灰層」は、実は約100万年前に九州の巨大噴火で舞い上がった火山灰が風に乗って、当時は湖沼や海だった吹田に積もったもので、現在では見られる場所はわずかだけです。このピンク火山灰層について紐解きながら火山活動や、大阪層群の成り立ちを紹介します。

吹田の哺乳類

最近、吹田市ではキツネなど多くの野生動物の目撃情報があげられています。1960年代の開発により一度は自然が失われたこの場所に、なぜ動物たちが戻ってきたのでしょうか？ 今回の展示では、吹田で見られる野生動物のはく製標本や、定点カメラが捉えた映像と合わせ、様々な動物たちが人間と共存している吹田市の環境について紹介します。

昆虫のふしぎ

例年、夏季展示では市内小学校4年生のみなさんに「すいたの自然はっけんシート」を配布し、子どもたちが興味を持った生物や環境について報告してもらう取り組みをおこなっています。今年は前年度の応募作品の中から昆虫をとりあげ、子どもたちが興味を持っ

たことや疑問点について掘り下げて紹介します。

吹田で見られる生き物たち

「都市」としてのイメージが強い吹田市ですが、意外と多くの種類の生き物を見かけることができます。街なかの小さな緑地や、ため池や川といった水辺など、私たちにとって身近な場所で目にすることができる野鳥や水辺の生き物の実物標本を中心に、その特徴や生態を紹介します。

鉄道や鉄塔に沿うように巡ってみました

吹田市内には多くの鉄道路線が通り、特高送電線で繋がった鉄塔が連続して立っている様子が多く見られます。一方で、こうした現代社会の重要インフラに沿う遊歩道や公園では様々な植物が育ち、鳥や虫や魚もいて、季節の移ろいを感じる景観が広がっています。展示ではそんないくつかのエリアをスライドショーで巡りながら紹介します。

大きな木

吹田の自然の特徴は、昔も今も人々の暮らしと共にある自然であり、つくられた自然・育まれてきた自然ではないかと考えました。その象徴として市民の木・クスノキをモチーフにした「大きな木」を会場中央に設置します。大きな木の周りには様々な自然のふしぎを知ることができる体験型の展示を配置し、大きな木の木陰で多くの人々が楽しく集える空間を創ります。

すいたの水辺の生きものたち(飼育展示)

3階ロビーで糸田川と大正川の生き物を中心に、吹田市周辺で見られる水生生物を展示します。

※展示内容は予告なく変更となる場合があります。

(すいはく自然発見隊 越智みや子)